

## 神保町の憶ひ出

市 島 春 城

都下に於ける吾等の古い馴染の地と云へば、早稲田は半世紀にわたる古馴染であるが、それよりも古い馴染は神田の餘り廣くもない一區である。委しく云へば一ツ橋から神保町に及ぶ地區である。一ツ橋通りは一時大學を始め各種學校の淵藪であつた。吾等が郷里で英學を學び、明治八年に出京して、入つた學校は乃ち東京英語學校であつた。それは一ツ橋通りの越後高田の舊藩主榊原侯の舊邸を昔のまゝ學校に充てたので、門も昔のまゝであつたし、教室も元の諸室に多少の手入をなし、墨を上げ硝子戸をはめた位の程度で、假校舍と見るべきものであつた。これとハスカビに大道を隔てゝ大學があつた。今の學士會館のあるあたり一圓の地で、それが濠にまで及んで、なか／＼手廣のものであつたが、これが兩校から系統を引いた最高學府で、吾等の出京した頃は開成學校と云うたが、其後東京大學と改稱し、法理文の三科が置かれたので、東京大學三學部と呼んでゐた。醫科だけは本郷の今の大學の所に別になつて

ゐた。此頃はまだ高等學校はなし、大學に入るには豫備門を潛らねばならなかつた。それは大學内に置かれてあつた。この大學は木造建築ではあつたが、英語學校のやうな間に合はせものでなく、堂々たる白聖館で、寄宿舎もあり、外國教師の爲め幾棟の教師館もあり、又數百人を容れ得る大講堂もあつた。吾等が豫備門を経て大學の文科に入つたのは文科が置かれた二年目で、當時の文科は純文學でなく、政治經濟の學科をも併せて文科と云うた。この大學の前面に大道を隔て、商業學校があり、外國語學校があり、一時學習院もあつたやうに記憶する。吾等は漢文を教はる爲めに外國語學校へも或る時間通つたが、今は商科大學と外國語學校が存するのみで、竹橋外の文部省は大震災後虎の門に移轉した。

單に以上學げたのみでも、神田の一區は文化に大關係のあることは絮説を待たない。尙ほお茶の水の濠が經界となつて向ふが本郷區であるが、神田に接近の處に昔の學府であつた昌平學校の舊址があり、そこには聖堂があつて、曾ては圖書館が開かれ、教育博物館が設けられたこともあり、それに隣つて高等師範學校があつた。此等も一ツ橋の學校の延長と見られないでもない。また私設の明治大學、專修大學、中央大學、日本大學等もあり、近くの九段下には大橋圖書館もあることを思ふと、文化機關の斯くまで多く存じ、亦文化の經歷に斯くまで富む所は、東京の何れを尋ねても神田の此一區に匹敵し得る所は決して無い。

學校の所在地として隠れもないのは、帝國大學所在の本郷、早稻田大學の早稻田、慶應義塾大學の三田等であるけれども、神田の學區には他にない一特徴がある。それは何かと云ふと、書物の集散地が此區に在つて、文化の裨補に大なる貢獻をなしてゐることである。大震災後市區の改正で裏町であつたのが表通りとなり、表通りであつたのが却つて裏通りとなつたが、斯る變化があつても、書物屋は繁昌してゐる。先づ富山房三省堂、東京堂のある神保町を觀察して見ると、此邊はもとから古本屋の無かつた所で、新刊を業とする大書店が多かつたが、一時繁昌した店もいろ／＼の變遷があつた。自分の記憶は餘り確かでないが、明法堂、敬業社、開進堂など云ふ書店があつたと思ふ。此等の中で明法堂は確か法律書の出版を主とし、敬業社は中學の教育書を専らとし、開進堂は數學書の出版が専門であつたやうに思ふ。尙ほ此外に八尾書店などもあつて、中には一時成功してなか／＼立派な店舗を構へたが皆潰れて跡方もない。洋書の専門店では小野梓氏經營の東洋館書店があり、中西屋書店があり、有斐閣も一時洋書のみを賣つたことがあつた。此等の内東洋館は小野氏の易簣と共に廢業し、其後一時集成社と稱して赤坂某が經營したが、それが移つて富山房となつてから既に半世紀を経て居る。中西屋は丸善支店と看板が代つたが、今も榮えてゐる。九段下には堅木屋書店が洋本の教科書類を専ら營業とし、今も繼續してゐる。

多くの書店が出版に熱中した動機は二つあるかに思ふ。一は法典編纂が成つたことと他の一は小學教科書の編纂である。此の二つの事は普遍的に全國に及び、共に大なる事業でこれに成功すれば巨利を收め得る所から、或るものは法典の出版に、或るものは教科書の出版に熱中した歴史がある。恐らく書店が大をなした原因はこれにあるであらう。東洋館書店を繼承した富山房が半世紀の功を積み堂々たる店となつたのも、一時教科書に全力を傾けたのが其成功の第一歩であつたやうに思はれる。今日實力に富む書店の經歷を尋ねると大抵この二大事業の孰れかに力を籠めて成功したものが多いのである。出版界の最大難事である。歴大なる種々の辭典を編纂出版し、之れに依り世を益し亦自らも利した富山房三省堂などは其功績大なるものであるが、これは資力が充實してからでなければ出來得ない事業で、一書を企て、其成功を見るまでには十年若くは二十年も費さねばならぬものがあり、其店に充分信用が無ければ財力だけで出來ない業であるから、辭書を専門にする書店の出來たことは、實に書店の一大進歩と謂はねばならぬ。

世間では書物商賣を水商賣と稱するものもあるが、これは此商賣の危険性を云うたもので、徒らに流行を追うて見込出版を事とするものは、中ることもあれば、外れることもあり、外れると幾萬の書物を紙屑にせねばならんから、危険性のあることは事實だが、併しおのづから除外

例もあつて、不朽の名著を出版するのは此限りでない。亦辭書出版を専一とするものも例外である。其譯は辭書の編纂ほど骨の折れるものはなく、一人の力で之をなせば一生を費すものもあり、衆多の力を併して作るもの、例へば百科辭典のやうなものも其冊數の多いだけそれだけ、十數年を経ざれば成功に至らない。これは流行など云ふ潮流を超越し、容易に競争者の起らないもので、堅實に丹精にやり遂げれば、それが長く流布するから、時に改訂増補を施せば永久性を持つから、此等は水商賣とおのづから選を異にする。しかし此等の書は目前の利を眼中に置かず、堅實に歩み、丹精を凝し、久しきに堪へ、多くの時と資を要するから、結局資本主義の勝利に歸すると云ふべきであらう。

以上は出版書肆に就て聊か陳べたに過ぎないが、神保町(今川小路あたりも包容して)は寧ろ古本屋町として、つとに知れてゐる位、此邊は古本屋の淵藪であり、震災前は裏町にまばらにあつたものが、災後地區が變じて電車道路に面する表通りとなり、連齋櫛比、皆古本屋である。この古本屋の中には全然和漢の古刻書を専らとするもの、活版の古本を専らとするもの、出版を兼ねるもの等種々あるが、今便宜上一括古本屋として觀察するに、これも文化の爲めに大切な務をなすもので、斯る機關が無ければ、古書籍殊に和漢の古刻本の供給が何に依つて求め得らるゝであらうか。活字本の如きやゝ近刊のものは別として、古刻書を供給するものは古本屋

の内でも一種特異なものである。と云ふのはすべて物貨には何に就ても問屋があつて、それに就けば容易に仕入が出来るが、古刻書に就ては問屋が無いから、此種の古本を専らとする書店は随時種々の方法により買求めねばならぬ。時には各地に買出しにまで出ねばならんから、其勞は輕微でなく、往々旅費倒れとなることもある。大なる



神保町の書店街

掘り出しをして珍書で大儲けをすることがあつても、それは極めて稀有の事で、此營業は決して利得の大きいものでない。唯だ上品の商賣であると云ふので、割合に好んで此業に就くものがあるけれども、出版書店の如く裕福に行かない。殊に世相の變に連れて、大抵は活版本で間に合はせる傾向があるので、活版古本屋の方が寧ろ繁昌する譯でもあるが、店賣りだけではおつつかず、書林が聯合してデパートに進出するやうになつた。一面古刻書漁りをするものも段々に減じ、その買入も大震災後益益困難となつてきた。しかし古本供給はいつまでも大切であるから、吾等は其業務の持續を希望せざるを得ぬ。事實神保町の如く、連簷櫺比の書肆のあるのは客の爲めには便利のことで、書物を尋ねるに、一店に無ければ次ぎの他店で得らるゝ便利

がある。書肆同士も互ひに一所に居れば有無相通するの益もある。だから店の盛衰は頻々で、古い成り立ちの店は無いやうだが、三四十年の既往に較べるとどの店も可なり立派になつたやうに思ふ。

此町はもとから學生町の稱があつて、學生達は多くこの處で書物の供給を得て居る。古刻書を漁るものも亦常にこゝに足を運んでゐる。永い間に此地區から研究家が如何に多くの資料を得たか、好事家が如何に多くの珍籍を得たか、大藏書家の書架を充した本地は全くこゝに在ることを思ふと、此町が文化に貢献した功の大なることを感ぜざるを得ぬ。吾等も少壯より此本屋町のお蔭に浴した。随つて此町の前途の益々多幸ならんことを希望せざるを得ぬ。